

親と子の絆づくりを目ざして 「いのちの大切さ」の講座の実践から

(社)群馬県助産師会

はじめに

今、いのちを粗末にする事件が繰り返し起きています。とくに未来有る子どもたちが自らのいのちを手放すという悲しい事件には心痛みます。群馬県内の公立中学校、高校の子どもたちが自殺した数は、平成 11 年度からの 8 年間で 25 人でした。子どもに何があったのか。“いのちの重み”を考えるならこの数は、なんとも痛ましく、子どもたちの悲痛な叫び声が聞こえてくるようです。「あなたの生きようとする力が、自分自身も周りの皆にも多くの幸せと喜びを与えている」という真実。あなたがいなくなることがどれほど多くの人々に深い悲しみを与えるのかということをもっとはやく気づかせていたら、自分でいのちを手放す事は無かったでしょうか…。多くの親には、産声を聞いたあの日のあの瞬間。しっかりと胸に抱きしめ、幼いいのちから伝わるぬくもりを感じながら至福の喜びに涙した時のことを想いおこして欲しい。それが我が子を守る手がかりになると思うからです。子どもの自己肯定感や自尊感情を育くむには小さいころからの家族や周りの方々の肯定的なかかわりが重要だとされています。いのちの現場にいる助産師として、親に伝えなければならないことがある。そうした思いで小学校に出向き始めてから 10 ヶ年間で過ぎようとしています。

1、自ら命を手放す子どもたち 9割の原因が家庭問題

日本における自殺者は、過去 10 年間の推移を見ると、毎年 1 年間に 3 万人を超え深刻な社会問題となっています。平成 19 年では小学生 8 人、中学生 51 人、高校生 215 人、大学生等は 599 人でした。19 歳までの未成年は 548 人自殺で亡くなっています。その原因や動機で最も多いのが家庭問題で約 90%を占めています。親子関係の不和・家族からの叱責等によるものです。次いで学校の成績・進路・友だち関係・いじめ・教師との人間関係等の学校問題が約 30%、さらに健康問題が約 28%でした(警察庁調べ重複)。こうした数字を見ると改めて家庭問題が大きな要因となっていることに気づかされます。

その背景には「オレなんてどうせ・・・」といった、生きる気力を失い自己肯定感や自尊感情が低い子どもたちの姿が見え隠れします。

2007 年、ユニセフ(国際児童基金)が先進国 25 カ国の子どもを対象に行なった「幸福度調査」の結果、日本の 15 歳の子ども 30%が「私は孤独!」と回答し、幸せに感じていない割合がダントツの不名誉第一位であり、関係者に大きな衝撃を与えました。

2、「生まれてくることのすごさ」「生きていることの素晴らしさ」を伝える講座の実践

私たちは、10年前より主に県内の小学校に出向いて、親と子どもを対象に「いのちの大切さ」を伝える講座を行なっています。きっかけは、神戸の児童殺傷事件でした。県に強力に要望し事業化できました。現在では県・市の事業と助産師会の独自事業が半々です。この講座は親と子どもの自尊感情・自己肯定感を育むことを目指しています。助産師の専門性を生かし「生まれてくる事のすごさ」「生きていることの素晴らしさ」を伝えるため、独自に開発した教材が次々と登場する体験学習主体の教育プログラムです。いのちのかけがえの無さ、大切さ、素晴らしさを実感し、それを親と子が共有することにより、自分自身の存在を肯定でき大切に思えること。それにより他の人も大切にできるようになります。

このたび、10年の節目にあたり、講座により親と子どもの心にどのような変化がおきたのか、教育学の専門家に本講座の教育評価をしていただきました。北九州市立大学黒田耕司教授による感想文の分析と、長崎大学上園恒太郎教授による講座前後に行なった連想法の分析に基づく2手法による評価です。その結果「“かけがえの無いいのち”であることの気づきを促し、講座が目標としている、“自尊感情”“自己肯定感”を育くむ上で役立ち、

『今の日本に必要な授業である』と判定されエビデンス(科学的根拠)に基づいた講座内容の意義と有効性が裏づけられました。

右表は平成12年度から過去8年間の実績で、学校数と実施人数を表しています。平成19年度は114校、約1万6千人に実施しました。その内訳は児童数約一万人、保護者数約6千人でした。毎年県内すべての小学校の約三分の一に出向いています。

実施年度	学校数	実施人数(人)
平成12年度	57	4,462
同13年度	81	10,417
同14年度	92	11,878
同15年度	91	10,732
同16年度	104	13,171
同17年度	100	12,569
同18年度	117	15,738
同19年度	114	16,032

3、伝えたいメッセージ

講座は、子どもたちだけでなく無く保護者にも向けられたメッセージともなっています。生まれてきた時のこと、産んだ時の事を子どもと共有体験する事により、子どもとのかかわりを改めて見つめ直すきっかけになってほしいとの願いからです。

親子で講座を受けた後、保護者対象のミニ講話では3つのお願いをしています。一つは生まれたときの事を子どもにしっかりと話していただきたいこと。待ち望まれて生まれてきた世界でたった一つの宝物であること、子どもは多くの能力と生きる力を持ち備え生ま

れてきたこと、いるだけで周りに喜びと幸せをわけあたえる事ができる力を持っているということです。二つ目はお子さんを産んだ時の産声を聞いた瞬間に立ち返っていただきたいということです。そのときの感動は年月を経るごとにだんだん薄れていき、いつの間にか子どもに多くのことを望む親になってしまいます。産声をあげることができただけで泣いた瞬間。無条件で「うまれてきてくれてありがとう」と心から喜び合った瞬間を思いおこしお子さんとの原点に立ち返っていただきたいのです。三つ目はもう一度お子さんをおなかの中（子宮）に入れてくださいということです。羊水でまると守れているような安心感と心地よさを感じ取れるように、子宮を家の部屋に、羊水を暖かい部屋の空気に置き換えてみて下さいと提案しています。特に思春期では身体の変化に伴い心も大きく揺れ動き、不登校やリストカット等の自傷行為、いじめ等さまざまな問題行動が生じます。あたたかいお部屋の空気でまると身体を包んであたためて欲しいとお願いしています。

ところで、親の思いはなかなか子どもには伝わりにくいようです。ある学校の4年生の子どもの感想文には次のように記されていました。「私は今まで3回死にたいと思ったことが有ります。学校でいじめにあっているからです。家に帰ってから、私が生まれた時はすごくうれしかったとお母さんは言ってくれました。ふだん、こんなにおこるお母さんなのに、うれしかったんだ！これからは死にたいなんて思いません。今日から本当の私が始まります」とありました。母親の“ビタミン愛”が「死にたい」思いを打ち消してくれたようです。こうして多くの子どもたちは講座をきっかけに親から大切にされていることに気づき安心感を得ているようです。

4、親自身が自分と向かいあうところから

講座には、親自身が親としての在りようを見つめ直せるよう、心の揺さぶりをかけるためのたくさんの要素を織り込んでいます。特に助産師の視点から、それぞれの出産体験を通じて、子どもとの出会いの原点に立ち返れるよう心を耕す作業に重点を置いています。母親がどんな思いで新しいいのちの息吹を感じ取ったのか、胎内から伝わってくるダイナミックな動き、力強い産声、初めて大地を歩みはじめた我が子をどんな思いで受け止めたのか、それが親と子の豊かな関係性を築く上での重要な基盤になります。親や周囲からまると愛されている実感、認められている確かさ、見守られている安心感が子どもにとって自信につながります。子どもの自己肯定感・自尊感情の低さは大人そのものの反映だとも言われています。親の価値観がそのまま子どもに影響を与えるからです。親にとって心地

よい場所は子どもにとっても心地よい空間となります。親が素敵に輝いている時、子どもの瞳も輝いています。講座中、母親があちこちでよく涙を流す光景に出会いますが、涙は自己開示の第一歩とも言われています。心の奥底にとどめていた出産体験の記憶を思いおこし、親としての自分と向かい合える準備が整った合図です。

5、保護者からの反響

親に向けたメッセージを一人でも多く受け取って欲しいという願いから、保護者の参加を高める努力を重ねてきました。幸い学校側のご理解・ご協力により、授業参観や PTA の学年行事として取組んでいただけるようになりました。その結果保護者参加率は年々増え、昨年度は 114 校の平均は 66% でした。

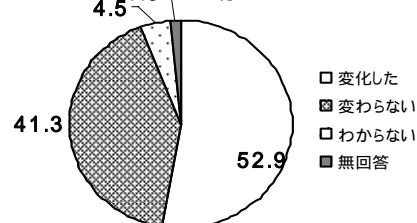
(1) 講座への評価

常にスキルアップを図るために、受講した保護者からも評価していただいています。平成 18 年度から 2 年間、100 校 3,555 人のアンケート調査結果では、講座の内容について「大変満足」62.4% 「満足」36.6% 合わせて 99% から肯定的な評価を得ました。

(2) 講座による子どもに対する思いの変化

グラフは講座を受けたことにより保護者の子どもへの変化を表しています。53%の方が「子どもへの思いが変化した」と回答。「どう変化したのか」については、「あらためて産んだ時のことを思い出し、いっそう愛しく思えた」等の感想が大多数で、改めて子どもとのかかわりを見つめ直すきっかけとなっているようです。41%は「変わらない」と回答、その理由は「講座で伝えたいメッセージと同じ思いで日頃から子どもに接しているから」でした。講座後、心温かくなるような親子のコミュニケーションの様子が伝わる感想文をたくさんいただいています、その中の一人を紹介します。

講座前後で子どもへの思いが変化したか



「悲しいお話ではないのに、涙があふれて仕方ありませんでした。『私たちのところに生まれてきてくれてありがとう』とても心に残る言葉でした。『がんばって』つい出てしまう一言。くぎをさされたようでした。『何をがんばるの』と心の声を聞いたような気がします。子どもに多くを求めてすぎていた自分を反省することができました。次の日息子が「生まれてきてよかった。ぼくをうんでくれてありがとう」と書いてくれました。私はその下に「うまれてきてくれてありがとう」と書きました。大きくなった息子の寝顔にそっと頬ずりをして、呼吸を合わせ「生きてる」ことを実感しました。私たち夫婦とこの子、そしてお兄ちゃんと。みんなみんな「ありがとう」でいっぱいになりました。5年生の母親

6、不参加の保護者に向けての新たな取り組み

講座に取り組み始めて10年目を向かえ、ようやく参加できなかった保護者にも目を向けられるようになりました。昨年度から、講座で学んだことを助産師からのメッセージとして返信型の手紙にし、講座終了後、担任の先生を通して子どもから家族に手渡していただいています。当初は参加しなかった保護者を対象に考えていましたが、子どもへの影響も配慮し、参加した方も含め全員の方をお願いしています。先駆的に取り組んでくださった、みどり市立笠懸小学校では、初年度はほぼ全家庭から返信されました。内容を分析していただきましたが「各家庭からの返信内容は講座そのものの精度の高さを伺わせるものであり、参加の有無にかかわらずほぼ同程度の傾向が見られ、とても理想的であり、指導後のアプローチが有効であった」と評価され意を強くしました。つまり、参加できなかった親も講座の様子がわかり、参加した親とほぼ同じレベルで子どもとのコミュニケーションを図ることができたのです。返信で寄せられた内容で一番多いのは親と子どもとのコミュニケーションの様子です。4年生のある母親からは次のような返信をいただきました。

「息子は2ヶ月早く生まれてしまい、1,605gでした。先生からは助からないかもしれないといわれていました。心配で毎日病院に父親と一緒にいき、会いに行き、何とか無事に育て欲しいと祈るような気持ちだったことなどを話しました。息子は涙ぐみ、顔を真っ赤にして聞いていました。『うそだ！信じられない！いつも俺をこんなにおこるのに！』といていましたが、うれしそうでした」

その他にも生後3年間つけていた育児日誌を子どもにみせたり、にぎやかな家族団らんの一時を過ごしたり、その日は特別な「家族のふれあう日」になっているようです。この新たな試みは、私たちが当初予測できなかった以上の成果をもたらしています。

おわりに

参加した保護者のほぼ全員から肯定的評価をいただき、さらに過半数の保護者は子どもへの思いが前向きに変化しています。また、返信用手紙作戦では、参加できなかった親も子どもとのコミュニケーションを図ることができ、親子の絆づくりのきっかけに役立っていると思われます。本事業にかかわっている助産師会のメンバーは通年かけて準備・実施・総括・事後評価、定例打ち合わせ、全国に向けて啓蒙活動や養成者育成等に追われ、多くのエネルギーを要しますが、専門性を生かし社会貢献できる喜びが継続へのモチベーションを高めます。今後も学校との連携を密にし、問題を抱えた家族への配慮をしつつ、公益法人としての役割を果たしていきたいと考えています。今日も喜びの出会いに胸を膨らませ、群馬の山奥まで旅芸人一座のように大きな荷物を積んで車を走らせています。